

今後の都市開発 のあり方

都市と人間



田村 明氏：

昭和25年東京大学第一工学部建築学科卒、運輸事務官、日本生命不動産部、(株)環境開発センター計画部長を経て昭和43年以来横浜市で企画調整部長、同局長を歴任、現在技監。



横浜・みなと祭りの大通り公園

歴史的にみると、人間は9000年も前から都市をつくってきましたが、古い都市といまの都市ではかなり形態が違ってきます。産業革命以降は都市化現象が顕著になっています。

日本の場合、欧米に比べ都市化が遅れて始まりましたが、そのテンポは経済の成長と同様に、世界に類例のないような急速なものとなっています。都市部人口の割合でみると、市制が施行された明治22年で8~9%でしたが、大正9年18%、昭和50年76%と増え、現在では80%に近いと推定されます。

そうしたなかで、人間にとっての都市の意味は大きく変化してきています。昔は大半の人が田舎で生まれ育ち、近くの都市の学校を卒業してから大都市で働き、定年になったら田舎に戻って生活するというパターンがありました。現実はともかく、精神的にはそうした気持で都市を見ていたのです。そういう時代には、人々の意識のなかで都市は遠くにあつて、ちょっと働くための稼ぎ場所、或は時時遊びに行つて見て帰るといふ見物の場所でした。こういう人々にとって都市は仮の宿でした。しかし、いまではほとんどの人が都市で生まれ育ち、住むところは都市しかないわけですから。近年話題となっているUターン現象も、よくみると農村に戻るということはほとんどなく、地方の中核都市あるいは県庁所在



横浜・港町くすのぎ広場

都市に戻るJターンが多いのです。農村では農業生産性の向上に伴ない雇用吸収力は低下しています。近年では都市からの工業分散が行なわれましたが、既に頭打ちで、また、工業自体も生産性が高まっていてそんなに多くの雇用を吸収するわけではありません。結局、将来の雇用人口を吸収するのはサービス業を中心とする第3次産業ということになりますが、こうした産業も一般に都市に立地するものなのです。

都市は大都市から地方都市までいろいろな次元がありますが、いずれにせよ大部分の人が都市に生まれ育ち、生活し、職業に就き、そして最後にそこで死ぬという一生の場所に意味が変わってきたわけですから。

こうなると、都市は人間にとって必然的なものとなってきます。都市化というのは否めない、もとへは戻れない状況にあるわけですから。

それにもかゝらず、いままで、われわれは都市というものを少し軽視、あるいは誤解してきたのではないかと思います。人間の側からは、せいぜい稼ぎや見物の場所であったところがいつの間にかわづか一代のうちに本質が変わってしまったのです。人間が都市をあまり振り返ってみる暇もないうちに、都市化の波の中に巻込まれていたというのが現代の都市ではないでしょうか。



横浜・伊勢佐木モール

ここで、都市をどのように捉えているかと申しますと、私は日本列島全体が都市化しているという認識をもっています。東京、大阪、名古屋と3つの大都市圏があり、合わせて約4,700万人の人口が集中しています。この場合、例えば東京都というような行政単位で抜き出して統計をとっても意味がありません。横浜など以前は独立していた都市もいつの間にか東京に巻き込まれ、大東京圏は神奈川、千葉、埼玉を包含した2,700万人の巨大な連帯都市を形成しています。これにとどまらず、日本列島全体でいま郡部と呼ばれる部分が人口にして20%強位ありますが、そこでさえ一種の都市生活になってきています。農村の乗用車保有率は都市を上回ってさえいますし、農村のテレビ、電話などの普及で大都市と同じように情報を得ることができず。たとえ北海道の端にある島で暮している人でさえ、実は都市生活をしているといえるのです。従って36万平方キロメートルの日本列島全体が、いまやすべて都市的になっているという状態にあります。われわれは都市から逃げるわけにはいきませんし、超巨大都市の中で生れてから死ぬまでそこに住まなければならない人々も多くなっています。

しかし、これまでの明治100年の都市化や都市づくりは、いわば仮設的な都市づくりで



横浜・県民ホールとプラザ

あったのではないかと思います。部分的な需要をなんとか満たしていくというやり方で、工場や事務所だけでなく、生活の基本であるべき住宅さえも、全く戸数を合わせ、最低の質で人々を収容するというやり方をしてきたわけです。これは仮設の思想であり、必要なものを必要なだけつくっているだけで、永続的にストックとして考えていない。従って都市全体を環境とした捉え方もなかったのです。街全体をみても、一体本気で一生住むための街をつくっているのかどうか疑問となってしまいます。昔の農家の建物などは立派なものが建てられていて、日本人がそれ程場当りのだとは思いませんが、少なくともこれまで都市に対してあまり熱心に考えていないところがありました。

しかし、都市以外に住むところが無くなってしまった今日では仮設小屋ばかりつくってはどうにもなりません。それぞれの都市をキチンとしたものにしていかなければなりません。これからは街を全体の長期にわたるストックとして考えて、本格的に本設の都市をつくっていく時期になったのではないかと思います。

仮設でなく本設の街づくりが必要となった今日では、都市開発に対する考え方を転換していかなければなりません。

都市開発で重要なことは、まず、公的な空間や施設をつくることですが、従来は非常に狭義に解釈され、公共施設といえば即ち街路と考えられてきました。役所はとにかく街路を整備するだけで、それも非常に後追的に時間がかかっていますが、民間は経済原理に従って敷地に目一杯の建築物を建てるというふうには進められてきました。これでは良い街づくりになりません。これからは両方が協力して良い公共空間をつくっていくことが大切です。横浜市では、馬車道商店街で車道を狭めたい民間宅地も将来2.5m後退するという約束のもとに、広げられた歩道にベンチ、植栽、街路灯などを配置して豊かな公共空間をつくり出しました。

良い街づくりのためには、お互いにルールをつくり、守る、あるいは規制しようということも重要です。これまで道路や建物は1つ1つが最低の法規のほかは勝手につくられ、全体としての都市環境は顧みられませんでした。仮設の都市であればそれでいいのですが、これからは、街全体としての美しさ、魅力をもつことが必要です。そのためには1つ1つの道路や建物が街全体の環境を意識してつくられなければならないわけです。単に法規的規制では美しい魅力ある街はできません。

次に、今後の都市開発では民間の知恵がもっと活かされるべきだと思います。従来はおカミがやることという意識が強く、そのため官民が対立的な関係となり易く、開発が暗礁にのりあげてしまうケースが多かったわけです。多勢の人がいろいろな考えをもって住んでいるのですから、都市開発は押しつけだけでできるはずがありません。市民が本当に住み良くすることを考えたうえで役所を巻き込んでいくということがあっていいわけです。

一緒に街づくりをやることによって、街全体を大切にやる意識が高まり、よりよく管理・運営されることになります。

また、いままでの日本の街はどこへ行っても同じような街でした。これからの街はそれぞれに個性をもつことが必要で、それにより日本列島全体が豊かになります。街の個性という点では、ヨーロッパの都市は非常に大切にしています。古いものが残されているだけでなく、新しく建てられた建物でも街全体との調和を考えてつくられています。過去、現在、未来と時代を超えて継続的に都市の個性をつくっていくというところは学ぶべき点だと思います。

魅力、楽しさ、意外性なども従来の都市開発には欠けていました。鋼材倶楽部で研究している人工地盤も公的な空間を増やすだけでなく、そういった意味をも備えています。また、道路にしても全てアスファルトでなければならないというわけではなく、モザイクタイルを使うなど楽しい道路があってもいいわけです。地方財政法では、役所は最小限の金で最大の効果をあげるよう定められていて、楽しさ、魅力などは無駄使いとみなしがちです。しかし、これまでは逆に安かろう悪かろうという無駄もあるわけです。魅力ある街をつくり将来に意味を持たせていく方が、長い目でみればはるかに効果的です。

従来の都市開発は結果的に画一的な街をつくり、それぞれの都市の個性や文化破壊のような一面がありました。今後は文化創造を認識すべきだと思います。ただものをつくるだけでなく、それが使われ、住民に愛され、自分たちの誇れる文化となる。伊勢佐木町の人達は伊勢佐木町を1つの誇りにしています。これは横浜の誇りにもなります。皆が努力を繰り返して文化として街をつくっていくことが必要だと思います。東京は広いですから全体として考えるほかに、浅草とか新宿とかの単位で町づくりが必要です。その他の都市もそれぞれに独自の地域文化を揃えていけば、日本列島は非常に豊かな社会となるわけです。

こうした都市開発を進めるうえで、これまでのように建物、広場、道路といった個別単位で考えるのではなく、総合的につくっていくことが必要です。また、それを自分たちのものとして続けていく市民性が必要です。

それと同時に、都市開発では事業を演出し、プロデュースすることも非常に大切なことです。都市開発は法律や制度に沿って決まった事業だけではありません。法・制度は勿論あった方がいいのですが、それに使われるのではなく、法制度は手段として使っていかなければなりません。都市開発を演劇にたとえれば、脚本家、演出家、プロデューサーによってうまく上演されていかなければならないわけです。

横浜市は、全国で唯一のアーバンデザインというチームをもっている自治体です。都市空間を全体としてデザインするわけです。これは非常にむずかしいのですが、建物などの単体のデザインに対し相互関係のデザインとっています。アーバンデザインとは、いきなり街全体をデザインするというものではありません。絵を描いて、これでやれというのはないのです。都市においては、いろいろな人がいろいろなものをつくっているわけです。

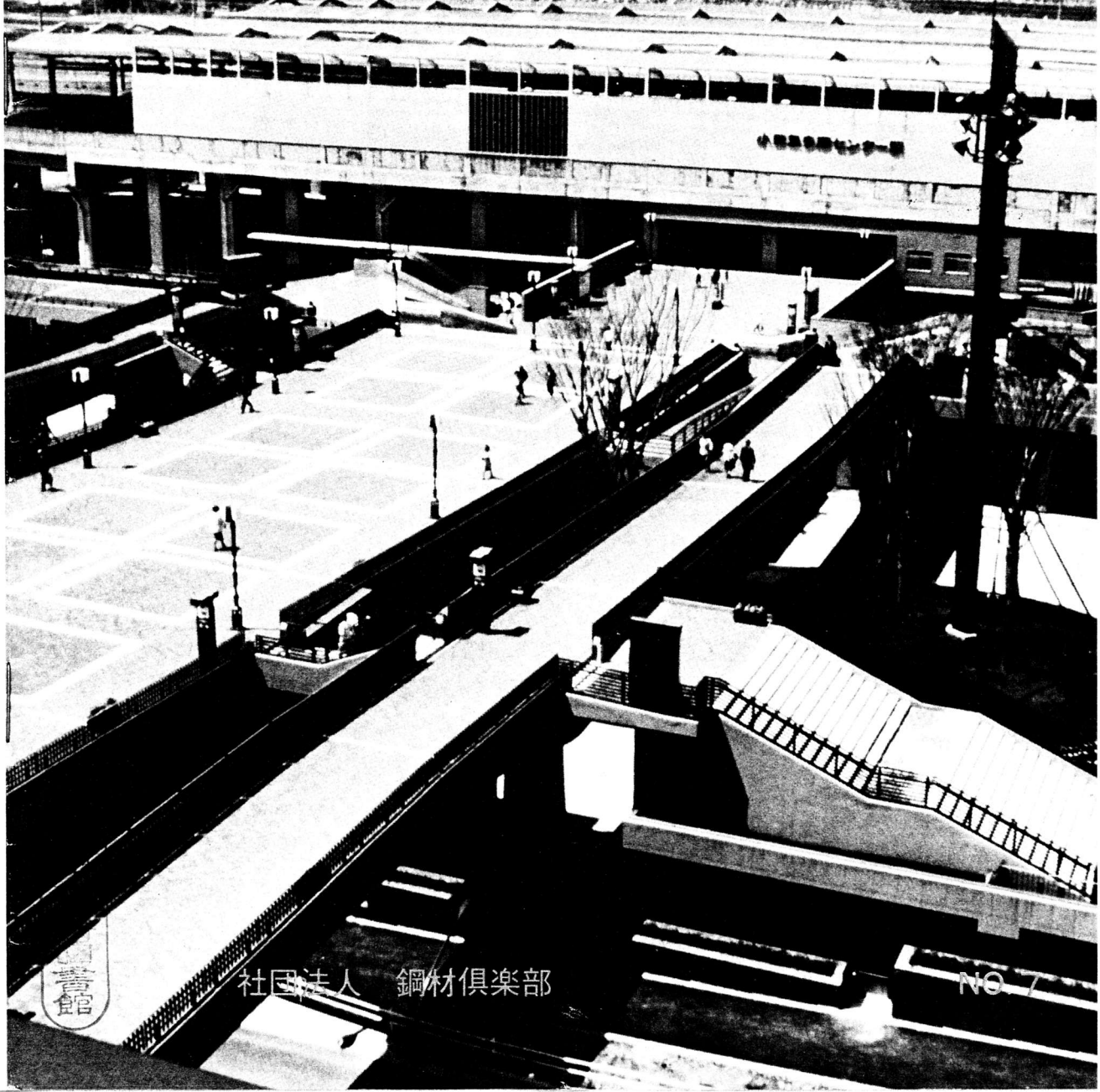
が、お互いに全体との関係や調和を意識して街を整備していくことが本当のアーバンデザインです。従ってアーバンデザインの仕事のなかには一種のプロデューサーのような役割があり、また、コーディネーターやオーガナイザーのような役割もあります。そうしたことをしながら最終的には全体としての都市空間を美しい魅力あるものにしていくのです。私は横浜でこうした試みをしてきましたが、十分なわけではありません。日本中にはアーバンデザイン的なセンスを持った人がたくさんできてそういう人が相協力して町全体をつくっていくことが望まれるわけです。

80年代はこうした本物の街づくりを進める時期になったのではないかと思います。日本経済が停滞的となったのだから、これからはケチケチやらないといけないという考え方も一方にはあると思います。しかし、かつての仮設の時代には、建設された道路や建築物がすぐに取り壊されるようなことが多くありましたが、これからは無暗に投資をするのではなく、1つ1ついいものをつくっていき、将来に対して街の資産として増やすといったストックの考え方で判断していくことが大切です。いままでは考える暇があまり少なすぎたのですが、今後は人間の知恵が十分に活かせる時代になったのではないかと思います。

519
M

message

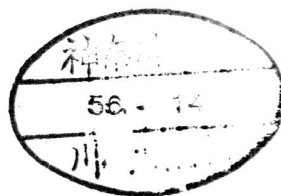
1980年代の建築



書館

社団法人 鋼材倶楽部

NO. 7



message

1980年代の都市開発-1

昭和56年3月

編集兼発行者 社団法人 鋼材倶楽部

東京都中央区日本橋茅場町3の16(鉄鋼会館)

〒103 ☎(03) 669-4811

大阪事務所	大阪市西区江戸堀1の3の22(石原ビル6階)	〒550 ☎(06) 441-5581
名古屋事務所	名古屋市中村区広小路西通2の30(東海ビル8階)	〒450 ☎(052) 581-7321
広島事務所	広島市中区基町13の7(朝日ビル3階)	〒730 ☎(0822) 21-0221
福岡事務所	福岡市博多区博多駅前3の2の8(住友生命博多ビル11階)	〒812 ☎(092) 441-6046
札幌事務所	札幌市中央区北二条西4の1(北海道ビル4階)	〒060 ☎(011) 241-7364
仙台事務所	仙台市中央2の2の10(仙都会館5階)	〒980 ☎(0222) 22-1637